

1 出席者

運営協議会委員（11 名）

【副会長】学識経験者：三浦副会長、社会教育委員：中村副会長

【公募委員】酒井委員、則竹委員、増子委員

【区内の社会教育委員】横山委員

【図書館関係団体から推薦を得た者】尾下委員

【中央図書館長】図書館職員：佐藤中央図書館長

【図書館側委員】図書館職員：梶資料係長、富樫利用者サービス係長、
鈴木こども図書館長

図書館事務局（2 名）

【事務局】図書館職員：萬谷管理係長、管理係大場

2 視察場所 目黒区立八雲中央図書館

(1) 視察場所選定理由

令和元年度の図書館運営協議会視察の対象として、新中央図書館建設の参考となる施設として要望があった。

目黒区立八雲中央図書館は複合施設であり、加えて、新宿区立図書館の配本車の輸送量が増加の一途をたどり限界を迎えつつある今、目黒区立図書館においては、所蔵資料について各館の蔵書として登録せず、返却された館の所蔵となる所蔵館方式を長く採用しているため、参考になると考える。

(2) 施設開館の経緯

平成3年度に都立大学が移転することを踏まえ、目黒区と東京都でその跡地利用が検討された結果、新たなまちのシンボルとして約10年をかけて完成した。教育・文化、福祉、環境の向上を目指した目黒区の複合施設である。整備にあたっては、環境に配慮した様々な取り組みを行った。

第一期工事として心身障害者センター、セレモニー目黒などがオープンし、その後、第二期工事として図書館、ホール、体育館等が完成。

八雲中央図書館が開館するまでは守屋図書館が中央図書館の役割を担っていたが、平成13～14年に準備室を置き、最終的に床面積3,000㎡、蔵書数40万冊を目指し、資料整備を行った。

複合施設はそれぞれの所管課により運営されており、業務委託や指定管理を導入している。図書館は貸出返却や装備など一部業務委託（指定管理ではない）を導入してい

るが、職員も 30 名程度配置されており、選書とレファレンスについては職員がメインで行っている。

(3) 施設概要

所在地：東京都目黒区八雲 1 丁目 1 番 1 号 めぐろ区民キャンパス内地下一階

階数：事務室、収蔵庫を含めたワンフロア設計

建物全床面積：34,550 m²（うち図書館 3,020 m²）

図書館開館時間 9 時～21 時（日・祝は 17 時まで）

休館日：毎月第 1 月曜、年末年始、蔵書整理期間

所蔵資料数：約 40 万冊

3 館内施設見学

(1) 入口から全体

BDS ゲートを入ると正面に館内図があり、正面に新刊コーナー、右手に新聞・雑誌コーナー、左手に貸出返却、レファレンス等のカウンターが設置されている。

ゲートの並びには館内専用のカートが多数配置されており、持ち帰り用の紙袋等も設置されている。

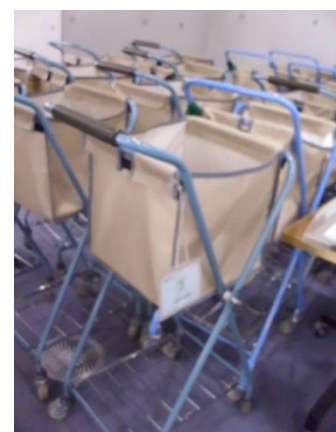
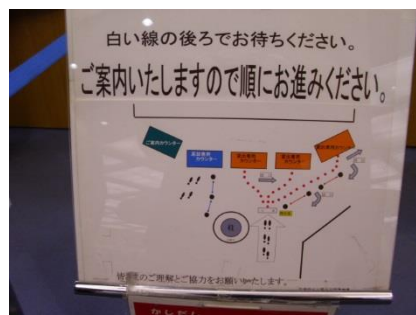
2 面にガーデンテラスが設けられており、テラス席での読書も可能。窓際と中央付近に閲覧席は集中して配置されている。

新聞・雑誌架の前には一人掛けの椅子などを設置。最新刊とバックナンバーを分けて配架している。

<館内案内板>



<館内専用カート>



(2) カウンターから YA、こどものほんコーナー

地下一階とは思えないほど採光がよく、明るい。

貸出・返却は業務委託しているが、資料相談カウンターは職員が対応。

YA コーナーは入口から見えない位置にあり、世代をターゲットとした選書が行われ、CD、スコアなどもまとめて壁面に配架されている。八雲中央図書館のCD所蔵数は約4,500点。寄贈メインで収集。

児童書のコーナーは圧迫感のない仕切りを後から施工し、内部では読み聞かせなどで声を出すことができる。職員の配置は以前あったが、現在はなし。

<児童コーナー付近>

<YA コーナー>



(3) 展示、外国語資料、大活字本など

こどもの本コーナーの外側は展示コーナーとなっており、折々の展示や友好都市、被災地の展示などを行っている。

外国語資料については一般書、児童書の区別をせずにまとめて配架し、面出しなどで目にとまりやすい工夫をしている。

このほかに大活字本など、あまり目立たない資料をメインストリートに配置。

<友好都市コーナー>



<大活字本・録音図書等>



<洋書コーナー>

(4) 旅と暮らしのコーナー

天板のない書架で天井の高さもあり圧迫感がない。耐震については床への固定と、書架同士を連結しているワイヤーで対応している。

健康・医学、冠婚葬祭等、園芸、ペット、教育、語学、ガイドブック、生活情報誌（雑誌）などを配架。料理や手芸などは同じ分類の中でも細かく見出しを設けている。

(5) 一般書のコーナー、小説・文学のコーナー

ガーデンテラスに沿って4人掛けの閲覧席があり、一般書のコーナー、内側に小説・文学のコーナーがある。

一般書には文学と(4)のコーナー以外の資料がNDC順に配架されている。

(6) 目黒区資料（地域資料）

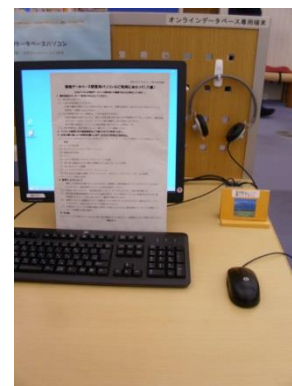
地域資料がNDCごとに分類されたあと、様々な見出しごとに配架されている。



(7) 参考図書、資料相談カウンター

参考資料として配架しているのは書棚3つ分のみ。禁帯、貸出可能なものがあわせて配架されている。

多くの検索機の中央に資料相談カウンターが設置されており、保存庫・書庫の資料についてはこちらで対応する。



(8) 公開書庫

自由に入れる書庫。内部に閲覧席がある。



(9) 保存庫

閉架式書庫。一般公開はしていない。資料相談カウンターで申し込みがあった資料を職員がこちらから運びだし、提供する。



4 その他（質疑応答等）

・選書について

目黒区書店組合から毎日納品があり、返却はおよそ4週間後。

資料係職員1名、他係1名で毎日選書を行う。その際、選ばなかった本は壁面の所定の位置に残し、後日資料係で再度選書する。3週目まで適時選書を行った後、4週目返本作業を行う。2名体制の選書は10年程度前から行っているが、他係も参加するようになったのは6~7年前から。

・利用者からの要望はどんなものがあるか

こどもの本コーナー周辺は、当初、仕切りがなかった。普通に会話ができる図書館を目指しそのように設計したが、思いのほか図書館に静寂を求める声が多く、後日仕切りを設置した。

ただし、仕切ったから苦情がなくなるわけではなく、今も子どもの声が聞こえていいという声と、もっと静かにさせるべきという声がある。

また、長い間「図書館ではお静かに」という指導を図書館側がしてきているため、くつろ

ぎの図書館を目指し会話を解禁にしても、利用者側で受け入れられない。図書館側の思いだけではなく、もっと利用者との対話をして決まりは変更していくべきと感じている。

席が少ないという声も変わらずにある。現在 100 席以上設置。試験時期等の学生の勉強についても賛否あり。

・所蔵館方式について

購入から装備まで中央館で行い、返却された館の書架へ排架されるため、職員が書架を整理しながら調整する。館ごとに蔵書の特色や収集用の書庫などもあるので、それを考慮し随時再配分を行っている。

再配分については専用配本車を週 3 回運行し、中央館事務室のバックヤードに並べる。規模として 7 段× 8 面＝約 1,600 冊程度。区職員が再配分する館や除籍などを検討する。

複本は予約数で購入する数を決めている。また、ピークが過ぎて書架に複本が多く並んだ場合は、各分館へ送ることで活性化をはかったり、公開書庫へ移すため、すぐに廃棄はしない。

・専門書、高価本の選定について

3,500 円以上の本は高価本とし、毎日の選書とは別に選定している。

専門書、リクエスト本なども同様に、担当者が選書している。

・複合施設内の連携はどのようになっているのか？

共催などはないが、目黒区には有名なバレエ団がありその公演がホールであったり、お祭りなどイベント時は展示をメインに行う。

・休館日数について

八雲中央、大橋図書館は第一月曜日のみ休館。

他分館は毎週月曜日が休館。

その他、年末年始、図書整理等がある。データの年度については、緑が丘図書館は設備整備により四カ月休館があったため休館日が多くなっている。

・登録率について

利用頻度と比例している。

・貸出密度とは？

貸出点数／人口で計算。区民 1 人あたりの貸出率なので、利用のない区民も計算には含まれている。他に並列で実質貸出密度として、貸出点数／登録者数で算出。

・学校との連携について

団体貸出が主であるが、家庭読書の啓蒙については、館内の赤ちゃん向けお話会、保健センターで行う10～11カ月児の両親対象の育児教室などで、読み聞かせの実演を行っている。

YAに対しては積極的なイベントや催しは行っていない。また、選書についてはYA担当がいるわけではなく、日々の選書でYAとして排架したほうがよいと思われるものを選んでいく。

5 まとめ

敷地面積としては中央・こども図書館の約半分、四谷図書館よりやや広い程度でありながら、書架も空間も非常に開放感のある造りに感じた。ガラスが多用されているためか地下一階には思えない明るさがあり、天井が高い。くつろぎやすいインテリアの充実もあるが、インテリアや書架の高さや配置、ワンフロアである利点を生かすよう動線が工夫されており、実際よりも広く感じる。



書架の見出し、小見出しが適度に細かく、利用者が欲しい本を見つけやすい工夫が随所に見られた。小規模の展示や面出しが行われ、目的なく館内を歩いても興味を引くものが多い。また、ほぼすべての書架に10cm程度の隙間が作られ、

本を戻しやすいためか乱れない。職員の手が入っていることが感じられる。

館内用カートや持ち出し用紙袋の用意(買い物でもらうようなもののリサイクル)などの気遣いもあり、館内表示もシンプルでわかりやすい。施設の充実とともにサインなどにも工夫があった。

また、職員が随時書架のチェックをし、複本調整を行ったり、違う館へ送ることで埋もれていた本に別の光が当てられる。こまめな作業が必要だと思うが、書架のすべてが書庫化せず、ブラウジングが楽しく感じられる。

2020年以降、新中央図書館の検討に入る際は、施設設備や蔵書に加え、居心地のよい空間やサービスなどの演出も含め、参考にしたい。

